「学習的適応」を高める授業の在り方

－国語科の学習における他者を意識したコミュニケーション活動の有効性－

学 籍 番 号　219205
氏　　名　奥田　望
主指導教員　柿　慶子
副指導教員　牧　郁子

1.「学習的適応」と学習指導

実習校で実施している社会性測定用尺度アンケート(小学4～6年生)の結果では，児童自身の自己肯定感や自己有用感の低さが課題である。アンケートを実施した4～6年生において，離席や学習活動の妨害といった問題行動が見られることは少ない状況であるものの，学校全体を見たとき，不登校傾向にある児童が増えつつあり，学校生活への不適応を未然に防ぐ取組みを考えることが必要であると考えた。この学校生活への不適応に関して，栗原ら（2010）は「学校適応感」という概念を挙げており，筆者は「学校適応感」を測る「学校環境適応感尺度(ASSESS)」（以下「アセス」）を構成する「学習的適応」に注目した。「学習的適応」は「学習効力感」や「学習への動機づけ」といった因子がまとまったものであるとされている。「学習的適応」を促進する授業の在り方を探るとともに，「児童の関心意欲を引き出し主体的に学べるような指導上の工夫」について授業研究を進めることとした。

2. 実態調査

現在，筆者は実習校において国語専科として国語の授業研究を進める立場であることから，国語科の授業実践において検証を進めた。授業実践の前に，授業を行う小学5年生1クラスにおいて，学級集団や児童個人の「学習的適応」や「生活満足感」等を調査し，学習指導における「学習的適応」を促進する手立てを考えるために「アセス」による調査を行った。栗原ら(2010)は「学習的適応」と「非侵害的関係」には相関があり，「非侵害的関係」と「友人サポート」，「友人サポート」と「向社会的スキル」にも相関があるとしている。結果から，平均値より低い「学習的適応」をより促進するためには，「非侵害的関係」を高める必要性が見えてきた。そのために，単元学習において協働学習的な取組みを計画し，「非侵害的関係」と相関関係がある「友人サポート」，「友人サポート」と相関関係がある「向社会的スキル」や因子を高める取り組みを取り入れていくことが有効ではないかと考えた。

あわせて，「学習アンケート」も授業実践の前に実施し，国語科の学習全般における「学習に対する取組み」や「学習活動における他者を意識したコミュニケーション活動」に対する意識について調査した。この調査結果を踏まえ，①身に付けるべき資質・能力を明確にするとともに，児童にも単元計画（単元マップ）を事前に示して学習の目標や学習活動の目的を児童と確認し，学習意欲につなげていくこと，②学習におけるコミュニケーション活動において，考

えを伝える目的やその相手を意識して学習課題に取り組める手立てを行うこと，の2点を授業実践における具体的な方策とした。

3. 授業実践の実際

国語科の「読むこと」「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域ごとに授業実践を行った。学習活動の軸としたのは，児童が互いに考えを交流する場面であり相手の思いや考えを理解し尊重したり，相手の話を受け止めたりする他者を意識したコミュニケーション活動を言語活動として設定した。また，考えを交流する活動の後に振り返りの場面を設定し，自分の学習を思い返し，気になったことや疑問に感じたこと，それについてさらに考えたことや自己の考えの変容について書くことで，次時の活動への意欲づけにつなげたいと考えた。

あわせて，学習に対する意識調査も授業実践の前後に同時に実施し，取組みの効果について検証した。また，「主体的に学習に取り組む態度」について予め評価基準を設定し，評価に反映させるとともに，それらの評価を数値化した。そして．その変移を見ていくとともに．単元の学習において設定した言語活動の内容の有効性についても検証した。

4. 授業実践後の実態調査

授業実践後に再度「アセス」を実施した。「向社会的スキル」においては平均の50をやや下回ったが，その他の因子において数値は50以上となり，1回目と比較して「学習的適応」と「友人サポート」の数値に有意な上昇が見られた。栗原ら(2010)は「学習的適応」と「非侵害的関係」には相関があり，「非侵害的関係」と「友人サポート」にも相関があるとしているが，有意差は見られなかったが「非侵害的関係」の数値が上昇した背景には「友人サポート」の上昇があり，間接的に「学習的適応の上昇につながったのではないかと推測された。学習活動において考えを交流する場面で，友達の考えと比べて聞くことや交流を通して友達の考えから気づいたことをもとに考えをまとめる等，交流の視点を示したこと等が他者を意識したコミュニケーション活動として有効な手立てであったことが示唆された。

5. 総合考察

授業実践を通して明らかになったことを踏まえ，「学習的適応」を促進につながる授業改善や指導方法の工夫として以下4つの観点があげられる。

(1)学びに参加するための聴き方の指導と環境調整
(2)児童の学習への主体的な取り組みを促す課題設定の工夫
(3)言語活動の目的を児童と共有
(4)授業改善につなげる評価基準の設定

学習指導において，児童が「聴き方・話し方」や「振り返り記述の書き方」を「学び方のスキル」として身に付けることができるように学校組織としてのスキル向上に努めることが必要であり，今後の課題は，学校組織として「学び方のスキル」を向上させていくために，教員の指導観をいかに共有していくかということである。